

トリスタンの航海

三木賀雄

はじめに

アイルランドの画家ジョン・ダンカン⁽¹⁾は、19世紀後半に本格化したケルト文化復興運動の気運の高まりを背景に、『トリスタンとイゾルデ』と題する一枚の絵画を発表した⁽²⁾。その主題は、アイルランドの王女イゾーを、主君マルク王の妃とするためにコーンウォールへ連れ帰る、トリスタンの航海に想を得たものであった。画布の中央には、王と妃のために調合された愛の媚薬を、誤って飲み干そうとするトリスタンとイゾーの姿が、大きく描かれている。媚薬はめくるめく愛と苦悩をふたりに与え、ついには彼らを悲慘な最後にみちびく宿命そのものであった。みつめあって立ちつくすふたりの両手のなかに、媚薬をみたした透明の盃がみえる。白波を立てて咆哮する荒々しい海が、張りつめられた帆布や索具とあいまって、この劇的な瞬間の緊張の高まりをつぶさに伝えてくる。ふたりを運命的な出会にみちびいた船、暴力的ともいえる愛を呼び覚ました媚薬、彼らを別離と死へ追いやる海、おそらくダンカンは、海と船と媚薬こそが、この伝説の悲劇的なイメージを豊かに表現できる恰好のモチーフであると判断したのであろう。それらを簡潔な構図のなかにおさめ、さらに巧妙な仕掛けをほどこしてみせた。水色の媚薬が、透明な器をとおして、背景の海の色合いに溶け込むように描いたのである。それは見る者に、海と媚薬を取りむすぶ親密な関係を強く印象づけずにはおかない。しかし、はたして海と媚薬はどのような関わりをもつのだろう。この情景にはどのような象徴性が秘

められているのであろうか。これがこの小論で考察する主題である。

* * *

実をいえば、ダンカンが題材としたこの情景も、伝説の原初的形態に近いとされる、12 世紀のアングロ・ノルマン語による諸作品においては、必ずしも統一された筋立てで語られていたわけではなかったらしい。断定を避ける理由は、物語の首尾を一貫して伝える写本が現存しないからである。たとえば、ベルールは事実の叙述に徹する流布本系物語の作者であったが、残された彼の作品の写本にはこの情景を書きしめた部分が欠けている。心理描写を重視する騎士道物語本系の詩人トマについても事情はかわらない。わずかに、終章近くで、ふたりが「海で⁽²⁾」媚薬を飲んだという事実を書き伝えているにすぎない。これとは別に、13 世紀になされた外国語への翻訳作品には、いくつかの記述がみられる。ベルールの作品をドイツ語へ翻訳したアイルハルト・フォン・オベルクによれば、それは、イズーの船酔いを癒そうとして港に仮泊した船中での出来事であったとされる⁽³⁾。また、トマの作品のドイツ語への翻訳者ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクも、これとほぼ同様の筋の運びを採用している⁽⁴⁾。ところが、ノルウェー語への翻訳を試みたロベール師は、おなじくトマを手本としながらも、間違いが生じたのは帆走中の船上であったというのである⁽⁵⁾。周知のとおり、これらの翻訳作品には、随所に筋立ての変更や改竄がみとめられる。したがって、それらを一概にベルールやトマの忠実な翻訳とみなすわけにはいかない、というのが大方の見方であろう。問題の個所の描写にしても、翻訳作品の手助けを借りればおよそその推測は可能だが、それでもやはり正確に跡づけることはむつかしい。おそらく、いく通りかの語り方がなされていたのであろうとしかいえないのが実状である。

事実、12 世紀のアングロ・ノルマン領域の、氏名不詳の詩人が書き綴った『トリスタン伴狂』ベルン本（以下ベルン本と略記）は、翻訳作品とは異なる記述を伝えていて興味をひく。しかもその内容には、この情景の意味を読み解くための貴重な手がかりが含まれているように思われてならない。しばらくこ

の点について述べてみよう。ベルン本は流布本系物語の後半にあらわれる一挿話から着想された小編で、ブルターニュで流滴の日々をおくるトリスタンが、狂人を装って英仏海峡を渡り、マルク王の宮廷に暮らすイズーと再会するまでの、ごくかぎられた断片を主題とする。しかし作者は、登場人物の回想的言辞によって、物語全体の梗概を読者に示すことも忘れてはいない。トリスタンとイズーが誤って媚薬を飲むにいたった経緯も、そのようなトリスタンの言葉のなかで説明されている。トリスタンは、彼の巧妙な変装を見破れないイズーに、ふたりだけが知る過去の秘密をほのめかして、自分の正体を教えようとするのである。

Bien fu la nés apareilliee. 船の準備もすべてととのう。

Qant de havre fumes torné, 私たちが港を後にして、

Au tierz jor no failli oré. 三日目に風が落ちる。

Toz nos estut nagier as rains; 私たち全員が櫓を漕がねばなりませんでした。

Je meïsmes i mis les mains. 私もそれを手伝いました。

Granz fu li chaz s'aümes soi. ⁽⁶⁾ 暑さは耐えがたく、私たちは渴きを覚えました。

運命の瞬間は、風がトリスタンとイズーの行く手を阻む、という設定からはじまる。風、それも穏やかな風のほかに頼るものがなかった中世初期の船にとって、風は禁物であった。とりわけ高い波浪と激しい潮流がもみあうアイルランド海においては、その危険性は計り知れない。岸边近くであれば暗礁や砂州への座礁が、沖合いであれば果てしない漂流が懸念されたことであろう。実際、羅針盤を持たないこの時代の船舶にとって、航海は難破や漂浪ときびすを接する危険な行為であったのだ。この事実は船上の人々の心理にも大きな影を落としていたにちがいない。もとより、海上ではすべてが絶え間なく変化し、流動する。中世初期の航海者にとって、抜錨と解纜は、安定した世界、確かな生活実感との決別を意味する以外のなにものでもなかった。それでも、航海が順調であれば、陸の世界を支配する秩序の幻影に安住できたかもしれない。しかし、ごくわずかな海象の変化が、船をなじみの航路から押し流そうとするとき、日

常生活の幻影は瞬時にして消え失せ、かわって漂泊をも死をも受容する新たな意識が生み出されていたのではないか。たとえひとときかぎりの漂流であったとしても、帆を風に、舵を潮にまかせる船人の内面は、根なし人の諦観ともいふべき感情に色濃く染め上げられていたのではないだろうか。それは陸の世界から隔絶された周縁への志向であり、たえず陸から疎まれつづけた海の民に固有の心性であったが、しかし見方を変えれば、人間性を歪曲するもろもろの封建的束縛を解かれた自己を、投企へ向かわせようとする意識であったともいえる。おそらく、海上での流浪という事態は、「依存と服従と連帯の網の目にとらえられていた⁽⁷⁾」中世人のなかに、個人というまったく新しい観念を覚醒させる、数少ない契機のひとつになっていたのであろう。バルン本の作者は、トリスタンとイズーをこのような特権的瞬間へ導き入れたのだ。ふたりをすべての封建的規範から解放し、個性の証しとしての愛を呼び覚ますためには、それはかくべつ好個な状況設定ではないか。風ぎわたる海に漂う船は、中世的現実のなかの非現実地帯へ、ふたりをいざなう渡し舟という印象を強く与えずにはおかない。しかし、その風から、トリスタンは櫓櫓を用いて逃れようとする。もちろん、いち早く危難を逃れ、マルク王の負託に応えようとする願望のあらわれなのだが、その行動を透かして、トリスタンの心の奥底にひそむひとつの葛藤をうかがい知ることができるのである。

アイルハルトによれば、トリスタンは船上に生まれたという。船は、トリスタンの父リヴァランが彼を宿したブランシュフルールをともなつて、祖国へ帰航する途上にあった。ふたりは駆け落ち同然に、ブランシュフルールの兄であるマルク王のもとを脱け出してきたのである。船が沖合いに達したとき、ブランシュフルールは突然の激しい苦痛におそわれ、苦悶のうちに絶命する。人々は死せる彼女の腹部を切り裂いてトリスタンを取り上げなければならなかった。＜悲しみの子＞を意味するトリスタンの名は、このような不運な出生に由来する。もちろん母の命を代償として生まれたこと自体が最大の不幸といえるが、トリスタンの悲劇はそれだけにとどまらない。彼の誕生が正式な婚姻の結果で

はなかったからである。この当時、「結婚や血族関係のような個々人の私生活に関する諸規定を定める⁽⁸⁾」教会法の規制が、婚姻についてはきわめて野放図であった世俗の権力に掣肘を加えつつ、徐々に人々の生活に浸透しはじめていた。カトリック的父権主義社会の実現をめざす教会にとって、婚姻にく正式な>という宗教倫理の制約を課すことは、封建的身分制度の根幹をなす血統の維持という問題に直接関与し、その影響力を行使する上で、なによりも有効な手だてであったのだ。それゆえ、血統の乱れを引き起こす「不道德な生活の報い」と信じられていた産褥死は、教会からの激しい指弾を受けることになる。カトリックでは「出産で死ぬ女性、あるいは洗礼を受けずに死ぬ乳児は地獄に落ちる」とされ、またこれとは別に「そうした母子はむしろ異教の天国に行く」とする俗信も伝えられている⁽⁹⁾。さらに、海上での死が忌み嫌われていた事実も忘れてはならない。その多くが最後の秘蹟を授かるいとまもない突然死であったからである。地獄の責め苦から魂を救う祈祷を受けずに死ぬことが、死後の魂のありように深い関心を寄せる中世の人々に、どれほど大きな懸念を抱かせていたかは想像にかたくない。辺境、とりわけケルトや北欧の文化圏では、カトリシズムの強化と普及が、逃げ場を失った魂を、異教の楽土に排除していたほどであった。このような時代環境のなかで、カトリックの教義から締め出されたブランシュフルールの魂が、「異教の天国」へ向うと考えられたとしても、けっして不自然とはいえないであろう。そして、古いケルトの伝説を起源とするこの物語においては、そこが海の彼方の冥界を意味することはいうまでもない。一方、トリスタンの誕生もまた、社会的・宗教的規定に抵触するとみなされていたのではなかろうか。「正式な結婚をしないで生まれた子供」に対しては「洗礼を一切拒否するのが習わしであった」とまでいわれるからである⁽¹⁰⁾。現実はどうであれ、騎士身分の理想像が、教会の意向に沿って作り変えられようとしていたこの時代においては、やはりそれは軽視できない瑕疵だといわねばならない。トリスタンの悲劇は、生まれながらにして社会と宗教から疎外されていたことに起因する。

このように、流布本系の作者は、海上での悲劇的な生誕というモチーフを巧みに利用して、トリスタンの心の奥底にとりついた相反するふたつの情動を暗示してみせたのだ。すなわち、既成社会への帰属を求める強烈な欲求と、海に対するぬぐいがたい思慕の感情である。前者は優れた騎士となって社会的帰属性を奪回すること。後者は母が死に、自分が生まれた海へ戻ること、つまり海と生命が織りなす女性原理への退行の夢である。のちに見事な若者に成長したトリスタンは、見聞を広めるためと称して他国へ船出する。しかし、なぜかの行き先は、伯父のマルク王が統治するコーンウォールであった。かつて母が命を落とした船路をさかのぼり、母の祖国に遍歴修行の場を求めようとする行動は、トリスタンのなかで繰り広げられるふたつの情動の葛藤を如実にあらわしている。もちろん、父親の庇護のもとに、男性原理が支配する騎士階級に育った彼においては、社会的帰属願望が常に優位をしめる。顕在化する欲望はマルク王のよき騎士となることであり、そのためには海を死の形象化された姿とみなし、航海によって克服しなければならない。無敵の騎士モルオルトと雌雄を決すべく、単身海をわたって沖の小島をめざしたときも、モルオルトの毒の刃に傷つき、ひとり小舟に身を横たえて海に命運をゆだねたときも、金髪のイズーを求めて当てのない航海に出かけたときも、そのあぐく嵐に流され最も危険な敵国アイルランドへ漂着したときも、その動機はすべてマルク王への忠節に根ざすものであったが、死、すなわち海の克服による生の獲得という行動図式が変わることは一度もなかった。

ベルン本において、風に足止めされたトリスタンが、力漕して難を逃れようとする理由も、そのような情動に突き動かされた結果にはかならない。しかし、それは理想化された騎士の鋳型にみずからを鋳込もうとする情動であり、自己の真の欲望に目覚めないという意味からすれば、仮性の情動といわねばならない。媚薬はまさにトリスタンの内奥に巣食う仮性の情動の幻影を一挙に破壊する。愛欲の解放を梃子に、トリスタンをすべての封建的抑圧から解き放ち、真正な自己を求める探求へ、自由な自己実現へと導くのである。その意味で媚

葉はトリスタンの精神にひとつの死を与え、すかさず別な生を促す役割を果たしたともいえる。すなわち仮性の情動に生きたトリスタンは死に、真正の情動のままに生きようとするトリスタンが生まれたというわけである。退行という現象が、より良い再生のために死ぬことも意味するならば、媚葉は、そのような意味での退行を呼び覚ます引き金になったのではないか。そして同時にそれは、海というものの性格に通底するとはいえないだろうか。前述のように、中世の海は、しばしば船人たちを既成社会の周縁に押し流し、自己に目覚めた新たな生に向わせる契機となっていたからである。もしそのような解釈が成り立つとするならば、＜媚葉の器を透かして見える海＞という構図を用いたダンカンの、並々ならぬ手腕を見過ごすわけにはいかない。透明な盃は、その両者の近似性を強調しているのだ。人間の知恵や努力をはるかに越えた偶発的で暴力的な力、その力がみせる魅力的な自由への幻影、その幻影を享受した者をとらえ、苦悩と死へ追いやらずにはおかぬ流浪の定め。両者が人間に迫る共通の運命は逸脱であり、定点の喪失であった。そしてまさにそれこそが、かざられた空間のなかで、厳格な規範のうちに暮らす多くの中世の人々を、魅了してやまなかったこの物語の主題のひとつではなかったのだろうか。

* * *

『トリスタン佯狂』には、流布本系に属するベルン本を下敷きにして書かれた、もう一編の別な写本が存在する。オックスフォード本の名で知られるその作品は、騎士道物語本系の逸名詩人による作とされるが、ふたりが媚葉を飲むくだりで、ベルン本とは異なる記述をみせている。ベルン本に対応する場面で、オックスフォード本のトリスタンはイズーに向って次のように語りかける。

Quant en haute mer nus meïmes,	私たちが大海原に出たときに、
en vus dirrai quai nus feïmes.	私たちが何をしたか申し上げます。
Li jur fu beus e fesait chaut,	よく晴れた暑い日でした。
E nus fumes ben en haut.	私たちは上で気持ちよくすごしておりました。
Pur la chalur eustes sei ; ⁽¹⁾	暑さのせいであなたは喉がお渴きになられた。

また、イズーの侍女ブランジャンにはこのようにいう。

Quant venimes en haute mer,	私たちが大海原に出ると、
Li tans se prist a eschauffer.	気温が上がりはじめた。
Je avei vestu un bñalt.	私はブリヨを着ていたが、
Tressüé fu si oi chault,	汗をかき、暑くてならなかった。
Je oi sai, a baivre demandai ⁽¹²⁾	渴きを覚え、飲み物を求めたのだ。

ベルン写本と同様に熱気の衝迫に言及するものの、上記の引用には、風の発生と機走による回避行動についての叙述がみられない。この異同はやはり疑問を抱かせる。なぜなら、気温の上昇と風の発生は、関連した現象として一般に理解されていたふしがあるからである⁽¹³⁾。また、こと船舶や航海に関するかぎり、常に肯定的な姿勢をみせた騎士道物語本系の作者たちは、それらについての克明な描写を怠ることがなかったという事実もなおざりにできない。たとえばトマは、ブルターニュで深手を負ったトリスタンの願いを容れて、ロンドンまでイズーを迎えに行くカエルダンの航海を語るのに、破格とも思えるほどの多くの行数を割いている。そこには、豪華をきわめる積載品と商都ロンドンのめざましい繁栄が、逆潮をものともせず英仏海峡を縦走し、テムズ河を遡行する操船手腕が、そして、風と潮位差を利用してイズーを脱出させる高度な海事技術が、この上なく精妙な筆致で描きだされる。さらに商業航海を称讃してやまないゴットフリートにいたっては、航海の目的や手法についての合理的な解釈に固執するあまり、不自然な文言を排除することも、ときには改竄することさえも辞さないほどであった。航海に対する好意的な姿勢は、オックスフォード本そのものにもみいだすことができる。イズーを求めて英仏海峡を渡ろうとしたトリスタンは、「堅牢で、美しく、大きく、商船としてまことにふさわしい⁽¹⁴⁾」船に便乗する。その船の出帆風景が、どれほど晴れやかに、またどれほど雄々しく、意気高く描出されていることか。これとは対照的に、海事事象に関しては冷淡なまでに寡黙なベルン本の作者は、トリスタンが渡航する同じ場面をいいあらわすのに、「海を渡りきると¹⁵⁾」という簡潔な一言しか費

やさない。そのベルン本が伝える風と梟走の逸話が、海についてはきわめて饒舌なオックスフォード本の記述から抜け落ちているのである。オックスフォード本の作者は、なぜこのモチーフを言い落としたのであろうか。

それは、作者が、風によって呼び覚まされる逸脱状態を、あの特権的な瞬間を意図的に排除したいと考えたからではないだろうか。海を封建秩序の埒外に位置する周縁とみなし、媚薬が恋人たちを導き入れる自由な世界の象徴ととらえることへの抵抗があったからではないだろうか。騎士道物語本系の作者のあいだに、海に対する別な見方が生まれていたのではないだろうか。その証拠にゴットフリートやロベール師の作品では、トリスタンの生まれた場所が海から陸に変更されている。彼らによれば、リヴァランは教会でブランシュフルールとの正式な婚礼をおこなったのちに、仇敵との争いに敗れて戦死する。夫の死を知らされたブランシュフルールは、トリスタンを生みおとすと、深い悲しみの中に息をひきとる。彼女の死は海上での産褥死という特異な形態から、夫への愛に殉じての死という、いかにも宮廷風物語に似つかわしく、また騎士理念にもかかった死に方に形を変えられる。たしかにトリスタンは、篡奪者による両親の死と領地の略取という悲運のさなかに生を受けるが、しかしその出生はあくまで正式な婚姻の結果であって、彼の社会的帰属性を損なうものではない。トリスタンは、生まれながらにしての仇持ち、復讐による名誉と領土の回復者という、騎士階級の一典型としてこの世に登場するのである。したがって、このトリスタンには、もはや自己確認の葛藤はない。彼の誕生と海との関わりが断ち切られた以上、海に出自を求めようとする志向それ自体がありえないからである。それゆえに騎士道物語本系の作者たちは、トリスタンがみずからの意志で、母の死と彼の誕生をみつめた海を遡り、母の故国へ航海するというアイルハルトの筋書きを、しりぞけなければならなかった。

彼らはこれを偶発的な事件の結果に帰したのである。彼らによれば、事件は北方の商船の水夫たちによるトリスタンの誘拐に端を発する。神はこの悪事を許さず、洋上に大嵐を起こして船を押し流す。あわや遭難かというまぎわに、

神の怒りを察知した水夫たちは悔い改めて、トリスタンを陸地に送り返す。偶然にもそこがマルク王の国であったというのである。この挿話において注目すべきは、海上での悪行に対する神の裁きという文学的常套句が導入されている点であろう⁽¹⁶⁾。古来、海は「神の手が加えられていない未完の領域、うち震えながらとりとめなく広がる混沌（カオス）⁽¹⁷⁾」と考えられてきた。その海が神の裁きの場に変わるのは、その領域を人間が侵しはじめたことの証左ではないのだろうか。もちろんこの主題の源は古く、『聖ブランダンの航海』にまでさかのぼるが、文学作品に頻繁に取り入れられるのは、十二世紀以降のことであった。このことは、とりもなおさず、この時期に陸上の宗教的規範が海上にも及びはじめたことを、しかも普遍的な規範として定着しはじめたことを裏付けるものである。

トマの作品にはその好例がみられる。ロンドンからイズーを連れ帰るカエルダンの航海に再び注目しよう。船は順風を受け、沖乗りのまま一気に英仏海峡を帆走してブルターニュをめざす。やがてトリスタンの待つ港を目前にしたとき、突然の嵐が船を襲い、つづいて風が船足を奪う。死の瀬戸際に立つ恋人を自分の手で癒すことができないイズーは、激しい焦燥にさいなまされる。ここでトマが嵐や風に言及するのは、ベルン本の詩人が描いたような、あの特権的な瞬間を呼び起こすためではなかった。トマは、それらを、イズーの苦悩を描き出すための道具立てとして用いたのである。嵐に見舞われ死を覚悟するイズーの独白をとおして、トマは彼女の愛の気高さを謳いあげてみせた。そこには、ひたすらトリスタンへの愛に生き、またそのために死のうとするイズーの昇華の過程が描かれるが、しかし同時にそれが、神への帰依を前提としていることに留意しなければならない。「神様、どうか私たちを会わせてくださいますように、／愛しい人、あなたを治せますように、もしできぬとならば／同じ苦しみのために、ふたりが死ねますように⁽¹⁸⁾」というイズーの言葉には、ふたりの運命を全面的に神に委託しようとする姿勢が明らかに読みとれる。トマは、嵐と風ぎを利用してトリスタンとイズーの罪科を裁定し、彼らの愛をキリスト

教的聖別というみそぎにかけたのである。その結果、媚薬によって引き起こされ、ふたりをとらえてはなすことのなかった激しい情熱は、ここに沈静する。

このように、すべてを封建秩序にかなった宮廷作法の範囲におさめ、なおかつ商業貿易の躍進を願った騎士道物語本系の詩人は、流布本系作者とはまた異なる流儀で、船と航海を褒め称えようとした。流布本系作品で語られる海は、封建秩序のなかで歪曲され、萎縮した人間性の解放を彷彿させる世界であった。これに対して、騎士道物語本系作者の描き出す海には、海洋の支配に目覚めはじめた十二世紀後半の時代精神が反映されている。彼らの意図は、海を神の統率下におき、そこに新たな秩序を設けることにあった。神の制裁を執行する海の圧倒的な力という挿話を導入して、封建秩序の根底をゆるがしかねない媚薬の愛を、神への愛にも匹敵する至純の愛へと変貌させようと試みたのである。ベルン本の風と橈走のモチーフは、すでに述べたように、海と媚薬に象徴される逸脱への夢を想起させるが、そのモチーフが騎士道物語本系に属するオックスフォード本から排除されたのは、以上のような理由からである。

結語

十二世紀末から十三世紀にかけてのポナンでは、従来のように海を社会の周縁とみなすばかりではなく、組織的な商業貿易と軍事遠征の要路として活用しようとする意識が高まりをみせていた。海の荘園が、沖合いにまで漁業権を主張し、漂着物取得権を争い、航海の安全を保証する通行証の交付にしのぎを削る時代に、トリスタン物語もおのずとその風貌を変化させなければならなかったであろう。この時期に書き残されたトリスタン物語は、このような変化の時代の混乱と影響を免れることができなかった。ふたつの『トリスタン伴狂』は、あたかも双生児のように相似した結構を持つが、少なくとも海と航海に関するかぎりにおいては、驚くほどの相違があったといえる。ベルン本は古いケルトの伝承の想い出を濃厚にとどめ、オックスフォード本は海へ飛躍しようとするブランタジュネ朝の人々の願望が投影されているのである。

ケルト文化の復興を標榜したダンカンには、前者に深い共感を覚えていたにちがいない。彼は透明な器を描いて、海と媚薬の相関を強く示唆した。両者ともが、突然の現実からの離脱と諸価値の転換、流浪と苦難、さらには、しばしば襲いかかる死の危険をはらんでいるからである。さらに画家はもうひとつの仕掛けを彼の絵のなかに残している。恋人たちが身にまとう衣装を、見事なケルトの組紐文様で飾ったのである。一本の紐が、あたかも目に見えない両端の切り口を相互に求め合うように、伸び進んでは絡まり、交差しては離れるこの組紐文様は、なによりも的確にトリスタンとイゾーの宿命的な愛を象徴するものではないか。果てしなく自在な展開を続けながら、永遠に結合をみないその運動は、愛の根源的な非充足性を物語るかにみえる。それは、不倫にはじまり、駆け落ちと別離をへて、ふたたび姦通へ恋人たちをかりたて、たえず人間の営為の限界にまで彼らを追いつめてやむことのなかった愛の、本質的な悲劇性をあらわしているともいえる。風と潮のおもむくままに海上を遊弋した中世の航海にも似た、その螺旋的な逸脱と迷走の軌跡は、永遠に到達点をもたない彼らの愛の航跡図にほかならない。ダンカンが描き出そうとしたものは、疑うべくもなく不毛な、またそれゆえに悲愴で美しい、安定への完璧なアンチテーゼであったのだ。そして、それゆえに彼は、海と媚薬が同時に登場するこのトリスタンの航海を、彼の絵の主題として選んだのである。

註釈

テキスト：ここでとりあげた各種トリスタン物語のテキストはすべてプレイヤッド版を使用した。アングロ・ノルマン語の作品の引用については、拙いながら翻訳を試みている。またドイツ語およびノルウェー語による作品に関しては、プレイヤッド版収録のフランス語訳を和訳した。したがって註釈中にテキストと表記があるのは、Christiane Marchello-Nizia, *Tristan et Yseut*, Gallimard, Paris, 1995 をさす。

(1) John Duncan, *Tristan and Isolde*, 1912, City of Edinburgh Art

Centre 所蔵 (図1 参照)



(図1)

- (2) テクスト p.195,
- (3) テクスト pp.,294-295
- (4) テクスト pp.,537-538
- (5) テクスト p.848
- (6) テクスト p.256
- (7) アグネ・ジェラル『ヨーロッパ中世社会史辞典』池田健二訳, 藤原書店, 1991,
pp.127-128
- (8) アグネ・ジェラル前掲書, p.303
- (9) 以上、出産に関わる引用はすべて、バーバラ・ウォーカー『神話・伝承辞典』
山下主一郎・他共訳, 大修館書店, 1990, p.72 による。
- (10) バーバラ・ウォーカー, 前掲書, p.72-73
- (11) テクスト p.229
- (12) テクスト p.234
- (13) この当時から気温の上昇と風の発生は関連したイメージとして定着していた
らしく、ベルン本のなかでも「風」と「耐え難い暑さ」が表明されるほか、ト
マもカエルダンとイズーの航海においてこの点にふれている。沿岸航法に依
存していたこの当時の航海においては、海風・陸風とその合間の風の影響を
免れることができなかったであろう。
- (14) テクスト pp.,218-219
- (15) テクスト p.248
- (16) Michel Mollat, *La vie quotidienne des gens de mer en Atlantique IX-XV
siècle*, Hachette, Paris, 1983, pp.,201-202
- (17) アラン・コルバン『浜辺の誕生』福井和美訳, 藤原書店, 1992, p.25
- (18) テクスト p.207

(神戸商船大学商船学部教授)